虫ぼし抄

千里山に輝くやこの本

浦　　和男

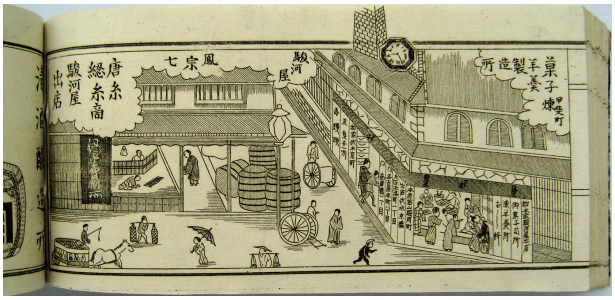
ビブリア古書堂の篠川栞子さんに古本を好きな理由を問えば、「人の手から手へ渡った本そのものに、物語があると思うんです……中に書かれている物語だけではなくて。」と答えてくれる。三上延のベストセラー『ビブリア古書堂の事件手帳』（メディアワークス文庫）の一節だ。図書館は古書店ではないが、栞子さんの思いは図書館の蔵書にもあてはまる。図書館は本を管理して、貸し出しをするだけが使命ではない。蔵書一点一点に、著者の、出版社の、旧所蔵者の、そして、その時代の物語が詰まっている。その物語を管理する使命も、図書館には課せられている。そして、その物語に価値を与え、著者の、出版社の、旧所蔵者の思いを現代に呼び起こし、輝きを与えるのは、研究者の、とくに私たち文化的研究に取り組んでいる者たちの仕事である。

私の恩師のひとり言語学者の千野栄一先生は、資料の発する匂い、呼びかけを感じなければいけないとおっしゃっていた。修行を積んだおかげか、図書館書庫に入ると凄まじきパワーを感じ、息苦しくなることもある。私にとって図書館書庫はパワースポットだ。人間関係のストレスで疲れていても、図書館蔵書の発するパワーにどれだけ癒やされたことか。

閑話休題（それはさておき）。スペースも狭いので、今回は「なにわ大阪」をキーワードに「虫干し」をしよう。本学図書館には、「大阪文芸資料」と「鬼洞文庫」という大阪関連の貴重なコレクションがある。それぞれの特徴は、図書館 HP の解説をご覧いただくことにする。

「鬼洞文庫」の目玉のひとつに「一枚摺」、チラシや番付などの一枚の紙ものがある。その内容は図書館 HP の「鬼洞文庫一枚摺データベース」で検索可能で、検索結果には写真が添えられる。その中に「**堺名所煎餅**」（L.22-674-217）という一枚摺がある。「堺市甲斐町四拾六番屋敷」の「駿河屋号　鳳宗七謹製」と印刷された、おそらく包装紙であろう。当時販売されていたであろう「堺名所煎餅」11 枚の図柄が描かれている。実は、この店は与謝野晶子の実家なのだ。晶子の実家は、『**住吉堺名所并ニ豪商案内記**』（明治 16 年）（N8-503.5-501）に描かれ、堺市の利晶の杜に再現されている（この「案内記」の作者は川崎源太郎、おもちゃ絵で著名な川崎巨泉の実兄だ）。この一枚摺の時代は、と眺めると、ヒントが図柄にある。「水族館の春」の「水族館」は、明治 36 年の第 5 回内国勧業博覧会（今で言えば国内の万博）の際に大浜に建設されたので、それ以降のものとなる。博覧会に際して「堺名所煎餅」を売り出しのかもしれない。晶子は 2 年前の明治 34 年に、与謝野鉄幹を追いかけて上京している。この「鳳宗七」は誰だろう。晶子の父宗七は二代目で、彼女は明治 11 年生まれだ。父は明治 36 年には 50 代。三代目の宗七は晶子の弟、この頃は 20 代で修業中であっただろうから、この宗七は晶子の父のはずだ。

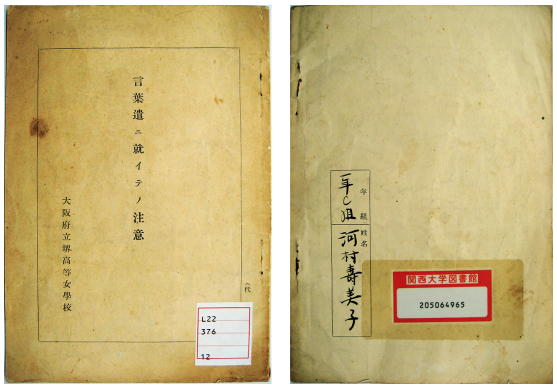
堺名所煎餅

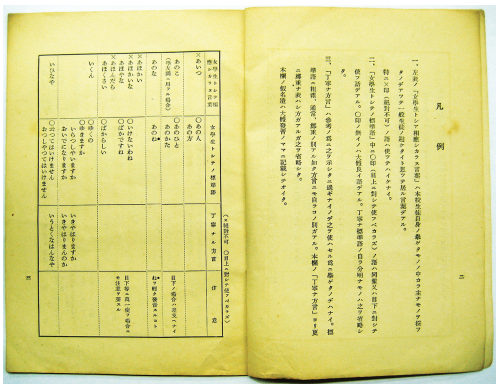


『住吉堺名所并ニ豪商案内記』の「駿河屋」

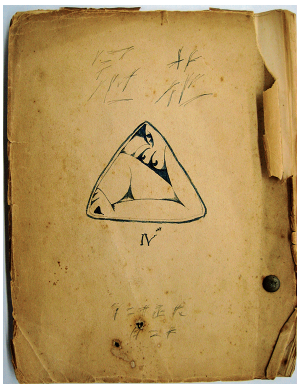
晶子は堺市立高等女学校で学んだ。後に大阪府立堺高等女学校となり、戦後府立泉陽高校となる。本学校友の作家西加奈子さんの母校でもある。「鬼洞文庫」に、堺高等女学校が発行した『**言葉遣ニ就イテノ注意**』（L22-376-12）という、B6 版 18 ページの小冊子がある。「日常生活ニ於テ、標準語ヲ使用スルヤウ絶エズ努力シナケレバナラヌ」として、「女学生ハ女学生トシテ相応シイ標準語ヲ使ハナケレバナラヌ」と注意し、「女学生トシテ相応シカラヌ言葉」、「女学生トシテノ標準語」、「丁寧ナル方言」、「注意」を 69 項目に分けて解説する。「絶対不可」には「×」、「目上ニ対シテ使フベカラズ」には「〇」を付す。たとえば、「あのな」は相応しくなく「あのね」を使うが、「ねヲ軽く発音スルコト」と注意される。「×」の付けられているのは、「あほかい」、「いややわ」、「うん」、「おもろい」、「そやし」、「どないしょ」、「…やんか」、「よっしゃ」など。「あかんし」も相応しくない。「〇だめですよ、だめでございます」が標準語、「あきまへんで（わ）」は丁寧な方言だそうだ。「かめへん」は相応しくなく、「〇かまひません、差支ございません」が標準語、「かめしまへん、かまやいたしまへん」が丁寧な方言、基準がよくわからない。当時のエリート女学校の言葉使いの指導がよくわかるが、「大阪弁」は女学生には相応しくないと見ている点がおもしろい。発行年の記載がなく、氏名欄に「一年Ｃ組　河村壽美子」と書かれている。ここから、年代の調べがつくだろう（河村さんをご存じの方はご教示願います）。

「大阪文芸資料」も強烈なパワーを発している。その中でも、世界に一点しかない資料が『**花冠**』第四号（LO2-051-K104）である。大正 12 年 12 月に、当時の大阪高等学校（大阪大学の前身）の学生たちが執筆した文芸回覧雑誌、手書き原稿用紙を綴じて鋲止めした手作りの一点ものだ（原稿用紙の筆跡はどれも本人ではない）。当時 18 ～ 19 歳の、作家を目指した若者たちの青春の作品集だ。指導的人物は藤澤桓夫。まもなく大阪を代表する作家となり、戦後も大阪文壇の中心的存在として活躍した。堀辰雄と東大で同級生で、横光利一にかわいがられ、武田麟太郎とは今宮中学の同級生、師匠とつきまとったのが織田作之助。父は藤澤黄坡。大阪の漢学私塾「泊園書院」の最後の塾頭で、関西大学文学部の名誉教授第１号。残念ながら藤澤の作品は掲載されていないが、その後「漫才」を演芸として確立した秋田實（本名は林廣次）、同じく長沖一（まこと）、のちに本学文学部でドイツ文学を講じた上道直夫らの作品が載る。大





『言葉遣ニ就イテノ注意』

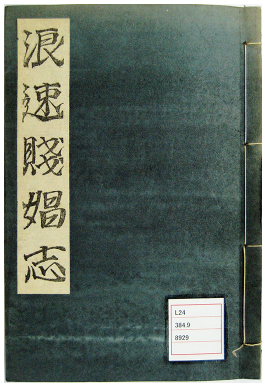


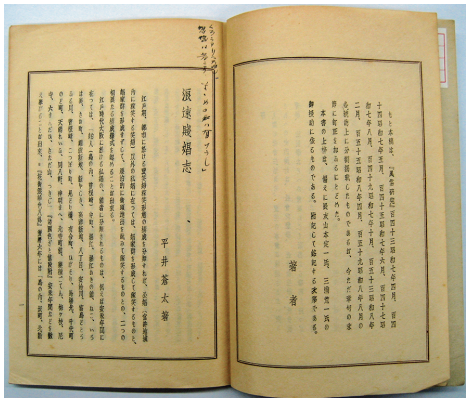
『花冠』

正ロマンの時代に、作家を目指した若者たちの思いが今に伝わる回覧雑誌が、本学図書館で異彩を放つ。今回ご縁があり、同人の一人長沖一の次男渉氏から、新たに創刊号と二号を寄贈していただいたことを記しておきたい。

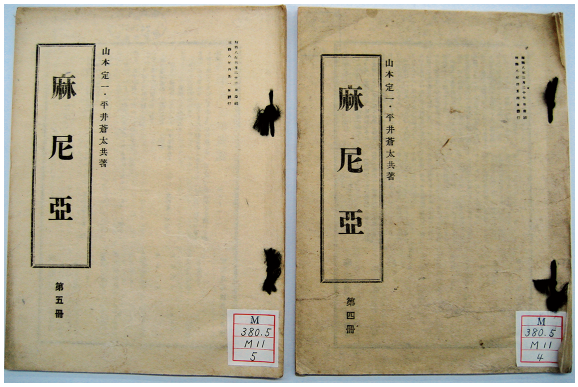
大阪関連の資料は、図書館長も勤められた、近世文学の泰斗中村幸彦先生旧蔵の「中村文庫」にも多数所蔵される。ここでは、かなりマイナーな平井蒼太の昭和８年発行『**浪速賤娼志**』（L24-384.9-8929）を紹介する。十三の「朗楓書店」から出版された、100部限定の私家本だ。同じ本は「大阪文芸資料」にもある（L02-H40-1）。平井蒼太、本名は平井通、そして実兄が江戸川乱歩。二人の父平井繁男は、なんと関西法律学校の第１期生。富岡多恵子による平井の評伝『壺中庵異聞』（集英社文庫。「大阪文芸資料」には富岡の署名入り私家版50部中４番（L02-T88-19）がある）によれば、蒼太の昭和31年の履歴書には「関西大学専門部経済科修業」と書かれているそうだが、富岡は修業年を書いていない。本学校友会名簿には、平井通の名前は見当たらない。蒼太は、戦前は風俗、とくに女性娼婦の風俗など、貴重な記録を残している。これを貴重な資料とみるのか、マニアックな猥褻本とみるか、きちんと検証する必要がある。この『浪速賤娼志』も、大阪の売春風俗の歴史を紐解く資料である。その内容はともかく、一冊一冊の和綴本で、とくに「宋朝体」という独自の活字を使っており、本作りのこだわりを感じたい。蒼太は『**麻尼亜**』（まにあ）という16ページほどの雑誌を昭和７～８年に６号発行した。これもまた私費を投じての趣味雑誌で、ここでは娼婦たちの呪いや迷信をフィールドワークをして集めた記録を紹介している。この「麻尼亜」は、４号と５号が所蔵されている（M380.5-M11）。

蒼太は関大卒業後（それが事実であるなら、福島学舎で学んだはず）、大阪市電気局の「電気部試験係」に勤務した。大正半ば頃から父、乱歩夫婦たちと守口に暮らしていた記録がある（この頃乱歩が執筆したのが「Ｄ坂の殺人事件」）。昭和７年頃に脊椎カリエスを患い、滋賀の方で養生してから上京した。発行者住所が滋賀になっている。さて、関大校友か？

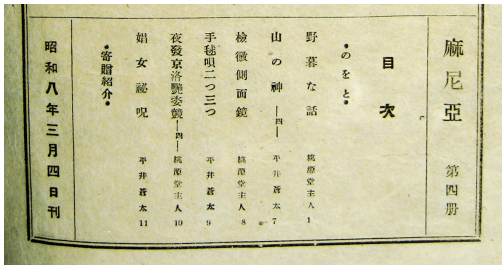




『浪速賤娼志』



『麻尼亞』４冊・５冊表紙

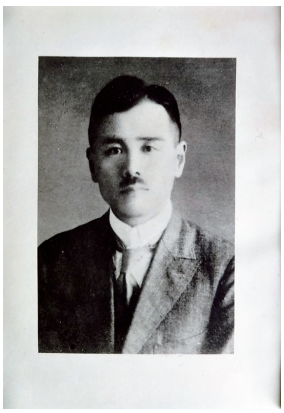


『麻尼亞』４冊目次

『麻尼亞』４冊奥付

一般書庫にも興味深い本が多い。驪城(こまき)卓爾の『**箕山遺稿**』(914.6-ko584-1)も私家本の珍しい本だ。驪城は「カルピスは初恋の味」を考え出した人物で、ようやく最近名前が知られてきた。この遺稿集にも、「カルピスの一杯が…青年者には『初恋の味』と歌はれ…」などの詩が載る。箕面の驪城山安養寺の長男、詳しい履歴は不詳、明治17年生まれのようで、西本願寺派の高輪学院で学び、福井の仏教中学、六甲山の二楽荘中学などで教えた。六甲山時代に当時今宮中学(現府立今宮高校)の教員折口信夫と知り合い、折口が上京し退職する後任として、大正3年か4年に着任した。その2年後に今宮中学に入学したのが、藤澤桓夫、上道直夫、武田麟太郎、本学部文学部英文科で教えた小野勇たちであり、さらにその翌年林廣次(後の秋田實)が入学する。のちに藤澤は驪城先生について随想している。この『箕山遺稿』には、驪城の短編作品、詩、和歌が収められ、彼はれっきとした「文士」であったことがわかる。藤澤たちが強い影響を受けたのは明らかで、まず、大阪高校で『花冠』という文芸雑誌が生まれることになる。藤澤と小野は早くから作品を文芸誌に投稿し、文学に目覚めていたが、その夢が大きく膨らむのは、30代前半の熱血教師驪城卓爾先生との出会いによる。藤澤桓夫は折口に教わることはなかった。しかし、折口去りし後、驪城先生が折口の文芸的雰囲気を伝えたことは想像に難くない。ついでだが、折口は天王寺中学で藤澤黄坡先生に教わったようだ。

『箕山遺稿』中表紙


驪城卓爾

1月に急逝した坪内祐三は「古書展に行くということは、未来への視線を鍛えることだ。」と言う。私たちは「図書館に行くということは、未来への視線を鍛えることだ。」と言うべきだ。本にこめられた過去の「物語」を読み解き、現代に再びその光を解き放すことは、過去を知るだけではなく、そこから学ぶことを現在に活かし、未来へつながる視線を見いだすことにもなる。その点で図書館とはSDGsの実践の場であり、学を実際に活用する「学の実化」に備える場でもある。本を借りる場所だけではない、本来の図書館の意義を今改めて考え直したい。

(うら　かずお　人間健康学部准教授)